

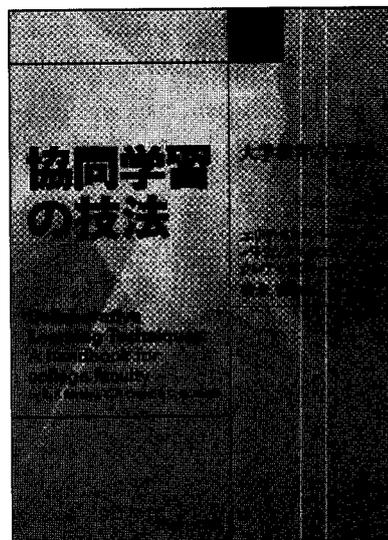
<会員による自著紹介>

協同学習の技法—大学教育の手引き

安永 悟¹⁾ (監訳)
関田一彦²⁾・ロバート=シャルコフ³⁾
甲原定房³⁾・長濱文与⁴⁾
安野舞子²⁾・右田麻衣⁵⁾ (共訳)

- 1) 久留米大学
- 2) 横浜国立大学
- 3) 山口県立大学
- 4) 三重大学
- 5) セントラル・ミシガン大学

ナカニシヤ出版 (2009年発行)
定価 3,500円 (税別)



本書は、協同学習による大学授業の改善をめざして書かれたエリザベス=バークレイ、パトリシア=クロス、クレア=メジャーの共著による「Collaborative Learning Techniques: A Handbook for College Faculty」(2005年刊)の日本語版です。大学授業の改善を意識した解説書ですが、紹介されている協同学習の理論と技法は小学校や中学校、高校の授業改善にも活用できます。

協同学習の本質は仲間との学び合いにあります。学習課題を理解するために、仲間同士が学び合うことを通して、学習仲間一人ひとりが課題を深く理解し、解決することができます。仲間との学び合いを通して、学習内容を理解することはもちろん、効果的な学び方が身につき、学びに対する意欲がまし、学ぶことの意味を発見することができます。また、学び合える仲間、学びを支えてくれる教職員、学びの場を提供してくれる学校に対する捉え方が変化します。なによりも競争の激しい現実社会で豊かな人生を送るためには仲間との協力が不可欠であるという認識が鍛えられ、協同の精神が醸成されます。

本書は三つのパートに分かれています。パート1「導入」では協同学習の文献と研究について簡潔で包括的なレビューが、パート2「協同学習の実践」では協同学習を授業で実践するうえでのヒントが、パート3「協同学習の技法」では効果的なグループワークを創り出す30の技法が紹介されています。

協同学習は、仲間同士が学び合い、教え合い、励まし合い、そして共に高まり合う学びの共同体づくりに不可欠な理論であり、実践方法です。一人ひとりが真剣に考え、対話し、活動する授業、そして一人ひとりが確実に変化・成長する授業の実現に向けて、本書が一助になることを期待しています。